

◆ 頂 点 ◆

河川には、当然の事ですが水が流れ、その命の源ともいえる水を求め多くの生物が集まってきます。河川の生態系は、その水に支えられ実に多種多様な姿を形成しています。生態系を考える場合、みなさんも一度は目にしたことがある「生態ピラミッド」を思い描いてください。ピラミッドの頂点、最上位には捕食者の猛禽類が位置し、下位に向かって哺乳類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類、植物…と繋がっていきます。これは、“食う・食われる”の「食物連鎖」の関係から構築されるものですが、一つの種が一つの種だけを捕食するわけではなく、複数の種を選択したり、逆に下位の種が上位の種を捕食する場合があるなど、鎖で繋がったような単純な図式ではないため、近年では「食物網」という言葉を使います。

さて、淀川で「頂点」に位置する猛禽類としては、主に魚類を捕食する『ミサゴ』や鳥類・小動物・昆虫類等を捕食する『チョウゲンボウ』『ハヤブサ』『ハヤブサ』などが生息しています。その中で今回紹介するのは『ミサゴ』です。河川敷に立って上空を見上げれば、白地に黒っぽい模様の羽を持つ『ミサゴ』が、川の流れに沿ってゆったりと飛翔する姿に出逢えます。ただ目は水面を鋭く見つめ、エサとなる『コイ科』や『ボラ』などの大型の魚類を探しているはず。エサを見つけると、空中でホバリングしながら体勢を整え、狙いが定まると一気に降下して体ごと水面に突っ込み、大きく強靱な爪でガッシリと獲物をつかんで、飛び立っていくのです。

「生態ピラミッド」において、上位の猛禽類が多種多様であるということは、エサとなる下位の生物も数多く生息している、つまり、支えるピラミッドの裾野が広く安定しているということで、その場所の環境がとても豊かであるという証拠なのです。



環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works

池田 哲哉



来た・見た・聞いた

淀川雑記帳



淀川の生物多様性をテーマに河川レンジャー活動をしているが、これまでは水生生物ばかりを調査していた。それがヒョんなことから陸生の昆虫を本気で捕ることに。5月頃から始めたが、ようやく虫を見つける目が養われてきたと感じる。魚を捕る場合は下を向いてばかりだが、今は上を向いている時間が長い。

「テントウムシ、2つ星と4つ星は違う種類なのだろう」と子どもの頃から思い続けていたが、実はナミテントウの翅の紋様は様々なパターンがあるそうだ。それと、もうひとつ。幼虫の頃にはすでに星が出ているではないか。知らないことを知る楽しみ。淀川で増えた。（編集長・石山郁慧）



水辺の博物誌



蒼い鎧を纏ったスズメバチの天敵

オオセイボウ *Stilbum cyanurum pacificum*

美しいメタリックブルーのオオセイボウ(大青蜂)は、体長20mm程度の小さな昆虫です。まるで宝石のような可憐な姿ですが、実は私たちにとって危険な昆虫の代表選手であるスズメバチの天敵です。スズメバチが泥で作った巣に穴をあけて、そこにいる幼虫に自らの卵を産みつけます。卵はやがて孵化し、オオセイボウの幼虫はスズメバチの幼虫を餌とするのです。スズメバチの親は当然、必死で攻撃しますが、オオセイボウの体は鎧のように強固で、スズメバチの毒針も平気。初夏から秋口、淀川水系の野山では、スズメバチとオオセイボウの攻防戦が観察できます。（画/鎌倉朝子）